

Community 4 Children



地域は子どものために、子どもは地域のために

Children 4 Community

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン

2017年度事業報告書

(2017年6月1日～2018年5月31日)



連絡先:一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン

〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町1丁目45番1-302号

電話 06-6622-5645 /fax 06-6621-7139

E-mail [community\\_4\\_children@yahoo.co.jp](mailto:community_4_children@yahoo.co.jp)

## 1. NGO 支援事業

### 1-1. 海外支援事業

2017年度は、タイ国カムクーンカムペン財団とフィリピン国 JPCOM-CARES と連携し、運営・活動を支援しました。またカンボジアの NGO・Khmer Community Development と協働で、ベトナム国境の村プレックチュレイの子ども会活動および新しい活動対象地への支援も行いました。

#### A. タイ国カムクーンカムペン財団（以下、KK 財団）支援事業

東北地方コンケン県ムアン郡サワティー行政区ノーンメック村とその周辺地域で、自治体や学校との協力の元、地元の村人とともに子どもを見守るコミュニティづくりを支援しています。

##### 1. 奨学金

出稼ぎ、死別、離婚などの理由によって両親と日常的に暮らすことができず、経済的にも困窮した生徒・学生にこれまで年額 6500 バーツ（約 2 万 3 千円）の就学奨学金支援を行ってきました。しかし、他の奨学金の選択肢も増え、地域の学校自体の問題や家庭の事情から、保護者、地域住民、学校、財団との連携が難しくなり、奨学金をどのように利用しているかを把握することが困難となりました。2017年度は、新たな奨学生を募集せず、男子 14 名、女子 10 名に継続して供与しました。内訳は、小学生 4 名、中学生 5 名、高校・専門学校生 10 名、短大 1 名、大学 3 名、研修生 1 名でした。



##### 2. 地元文化の継承

子どもたちが急激に変動する社会で生きていくための支援活動として、自分たちのルーツである地元の文化を身に着けアイデンティティを確立していくこと、廃れゆく文化の継承者として地域の発展にも貢献していくことを目指しています。

###### (1) 音楽活動

これまでの音楽活動の結果、何人かの子どもたちが先輩として年少の子どもに、週末、伝統楽器の演奏の指導を行っています。またコンケン大学の芸術学部の学生に指導してもらっています。

この活動では、男子は伝統楽器演奏、女子は踊りを学んできました。しかし奨学生は広範囲の地域に住んでいるため、集まるのが難しく、現在では奨学生に限らず、関心があって集まることのできるノーンタカイ・ノーンメック村の子どもたちを受け入れています。

その中心となっているのが小学生男子で、彼らは家庭に問題を抱え、世話する大人がおらず、地元住民からも“よくない子”と思われていました。学校でも地域社会でも自分に自信が持てず、問題に向き合うことから逃げていました。唯一居場所と言えるのは、年長の地元の不良グループだけでした。しかし財団の活動に参加し、伝統音楽を学ぶうちに、徐々に表情が豊かになり、自分の居場所を仲間や活動に見出すようになりました。音楽の練習をすることで、表現力を高め、エネルギーを発散することに加え、地元の先輩が楽器を教えることで、音楽以外の様々な相談をする相手を見出すことができたようです。音楽活動と子ども同士の交流は、子どもたちの身の安全にもつながっています。

## 演奏の練習日程

練習実施月	実施日数	参加人数(平均)	練習実施月	実施日数	参加人数(平均)
2017年6月	2日間	25	2017年12月	4日間	25
2017年7月	3日間	25	2018年1月	4日間	25
2017年8月	0日間	(農繁期)	2018年2月	2日間	25
2017年9月	3日間	25	2018年3月	0日間	(夏季休暇)
2017年10月	5日間	25	2018年4月	0日間	(夏季休暇)
2017年11月	0日間	(農繁期)	2018年5月	0日間	(夏季休暇)

## (2) コミュニティ文化の継承

### ◆仏日夕方の読経

地元の大人たちに子どもの活動をより深く理解してもらい、子どもたちへの見守り活動を広げるために、雨季（7月半ばから3か月間）は、雨安居と呼ばれる仏事の夕方の読経に子どもたちが参加しました。参加したのは、ノーンタカイ村とノーンメック村の子どもたち10-15名です。雨安居は、僧侶が寺院で修行に専念するもので、在家信者も月に4回（満月、半月、新月の日）、一昼夜を寺院で過ごします。2017年度も引き続きノーンメック村・ムアンポー寺院（ウドンタム寺）で活動を行い、読経の練習をするだけでなく、飲み物の寄進もしました。子どもたちが礼儀作法を学ぶだけでなく、コミュニティの中で年配者たちが子どもたちを見守り、お互いを知る機会となりました。

### ◆お菓子・液体スープ作り



前年度に引き続き、家計の負担を軽くするために地元の知識を生かし、天然素材からバナナの菓子と液体スープを作りました。村人たちが伝統的なバナナのお菓子を作るのに対して、今回は家政学を学ぶ奨学生が近代的なお菓子作りを紹介し、若者と年配者間の交流がありました。奨学生が作る可愛い形のお菓子やその包装の仕方に大人たちも感心していました。



液体スープは、タマリンド、アロエ、クミンなど身近で手に入りやすい素材を使って作りました。

実施日	場所	活動	参加者
2017年1、8、16、23、31日、8月3、28日、9月5、13、20、28日、10月5日	ノーンメック・ムアンポー村村落寺院	雨安居期の寺での読経参加	ノーンタカイ・ノーンメック村の小4から中3までの子ども、10-15名
2018年4月28日	ノーンメック村日タイ交流コミュニティセンター	お菓子・液体スープづくり	子ども、保護者、村人約20名

### (3) 技術・知識の習得

#### ◆アクティブ英語

初歩的な日常英会話を、ボランティアが小学5年生から高校・専門学校生までの5-8名の希望した子どもたちに教えるプログラムです。学校では一度分からなくなると授業についていけなくなりますが、楽しく学ぶことで勉強に関心を持つようになります。

実施期間；2017年10月（3日間）、11月（2日間）、実施場所；ノンメック村日タイ交流センター

◆自然学習（ネーチャーゲーム） 2018年5月5日於コンケン県カオスワンクワーン郡カムムアン行政区ルカチャート・カオスワンクワーン国立公園

KK財団の奨学生、OB/OG、保護者たち45名が集まり、自然の中で学び合いました。国立公園の中に入り、森の中に何があるのかを2つのグループに分かれ、食用になる植物、利用できる植物、動物や虫などを調べ、自分の村の公共林と比べ、本当の森とは今ある村の公共林ではなく、もっと豊かなものであることを知りました。そしてコミュニティの自然を取り戻すために何ができるか話し合いました。家族の交流も兼ねており、子どもと保護者の交流も図られました。

#### ◆視察・研修

KK財団と連携する青少年ネットワークや有機農法ネットワークによって開催された民間団体の研修や交流事業に参加しました。

・地域を愛する子どもキャンプ 2017年8月25～27日 於サコンナコン県パンコーン郡トンプン行政区ナーローム村集会所 参加人数総勢56名（内、KK財団からの参加10名）

毎年参加している村の青少年リーダー育成キャンプで、他の村や学校からの参加者たちと交流しました。伝統的知識を長老から学び、現在の日常生活で利用する技術を考えるセミナーを開催しており、今回のテーマは、「家族の森は、子孫に継ぐべき巨大な遺産」で、持続的森林保護を目的としています。根茎植物、蔓状植物、葉になる植物、多年生植物の4つのグループに分かれ、長老の導きで森に入って採集した植物から料理メニューを作る学びと実践のワークショップを行いました。森は自然災害から私たちを守ってくれるだけでなく、食べ物も与えてくれる大切な資源です。森から採集した種や苗などは、家屋の周りや田畑に植えて家族の森を増やすため、各自持ち帰りました。



・有機農法ネットワークイベント 2017年11月4-5日 サコンナコン県クットバーク郡クットバーク行政区スアンリムオー村・クットバーク村で、有機農法実践者から学ぶ研修に、奨学生やOB/OG25名が参加し、音楽演奏を披露しました。毎年行われている森林保護および有機農業普及のための研修イベントで、今回の目的は、森林の家族林や菜園への転用、コミュニティ森林や村の守護林の保護、果物や葉草の加工、青少年育成と有機農法の継承でした。参加者は実際にプーパーン国立公園に入り、実践者から学び、他の学校の生徒たちと交流しました。



・「国際花博—御父ラーマ9世を偲ぶ」 コンケン県・市協働主催 2017年12月5日於コンケン市ブントゥンサーン公園 参加人数20名。緑の大切さを伝えるため、花壇づくりや花の美しさに触れるイベントとして毎年開催されています。コンケン市青少年センターが運営し、多くの青少年ネットワーク関係にある団体の青少年たちと交流し、音楽演奏やセミナーなどに参加しました。

・足るを知る農業と家族林 2018年4月29日にノーンメック村の大人と子どもたち20名が、コンケン県チョンナボット郡コークプラ行政区コークプラ村に、コミュニティ森林と村人たちの活動を見学に行きました。森の中に入って、利用できる植物、販売できる植物などを大人だけでなく村の青少年も一緒に学びました。その後、有機農業実践農場に帰り、コミュニティの将来を担う村の青少年も話し合いに参加し、これからのノーンメック村の事業計画を一緒に話し合いました。

#### ◆精神修行（瞑想修行）

タイでは、仏教の教えが日常生活や人生の指針になっています。瞑想修行は、平常心を養い、様々な困難に立ち向かえる精神性を培うため、幅広い世代のタイ人が取り組みます。

特にコンケン県ウェルワン寺とその関連施設では、若者向けに瞑想修行コースと見習僧集団出家を開催しています。2017年度は、出家した子どもはいませんでした



が、寺院で戒律を守りながら集団生活をすることによって、日頃体験できない規律を学びました。強制はせず、子どもたちの自主性に任せていますが、短期間でも瞑想修行に参加した子どもは、少し大人になって帰ってきました。また瞑想コース経験者の子どもたちが自主的に年少の子どもたちの世話をするボランティアとして参加しました。寺院からも信頼され期待されています。

またカティナ衣奉獻祭では、保護者も一緒に寺院へ行きました。子どもたちがボランティアとして儀礼のセッティングや掃除などを手伝い、責任感を持って行動する様をみた保護者は我が子の成長に感銘をうけたようでした。

期間	場所	参加人数	備考
2017年10月15日	コンケン県ウェルワン寺院	20	カティナ衣奉獻祭手伝い
2018年3月20-30日	コンケン県ウェルワン寺院	3	15歳以上修行専念コース
4月1-5日	コンケン県ウェルワン寺院	10	5日間瞑想コース参加+ボランティア
4月15-25日	コンケン県ウェルワン寺院	8	11日間瞑想コース参加+ボランティア
4月27-29日	コンケン県ウェルワン寺院	12	3日間瞑想コース参加+ボランティア

### 3. ノーンメック村子どもとコミュニティのための活動

これまでKK財団では、子どもとコミュニティの両面での活動に従事してきましたが、子どもたちが地域を愛し、農民としての人生を愛するためにはコミュニティの力や絆が重要であると認識し、2016年以降コミュニティでの活動に重点をおくことにしました。そして子どもたちを見守るコミュニティの基盤を固めるために、有機農業の普及と公共林保全を村人たちと始めました。

## (1) 有機農法の普及

### ◆子どもとコミュニティのための実験農場

KK財団理事の一人が無償で貸してくれた4ライの土地で、子どもたちに地域や「農」を愛する心を育てるため、一緒に学びながら、有機農法で稲作を実践し始めて2年目となりました。堆肥と液肥だけで、稲穂が強く美しく育ちました。稲作の全行程において、村人たちは協力的で、収穫した稲の運搬、脱穀、耕作などにおいて無償で機械を貸し、食べ物や飲み物を差し入れてくれました。そして化学肥料で稲作を行っていた村人たちの中に、有機農業による成果を目の当たりにし、自分の田んぼでも化学肥料の代わりに堆肥を投入し、市販されている殺虫剤や除草剤の代わりに薬草で作った殺虫剤を使用する者も出始めました。

有機農業を始めるための堆肥、液肥、ぼかし作りを共に学び、仲間が増え、少しずつ活動は広がり始めています。コミュニティ内の大人と子どもの関係、「結」を通じた繋がりが深まるにつれ、村人たちは、隣人や親族からの信頼や友情、新しい知識、慈悲と団結、自信を得つつあります。自ら学び、方法を探し、考え、実践するプロセスを通して伝統を復活させ、有機農業に関心のある人々が増えることが期待できます。実践し始めた者は、関心のある人々に様々な経験や知識を伝達し始めました。村人たちの振り返りでは、青少年の力を得て農業を行うことの重要性、安全な食を得る有機農業の重要性が話し合われました。



### 稲作スケジュール

日時	活動	備考
2017年5月12日	耕起、堆肥づくり	
6月24日	苗床づくり	
7月5日	堆肥づくり	
8月11、12日	ぼかし、液肥作り、田植え	田植えには約50名参加（子ども、ノーンメック村大人、関心のある者、スタディツアー参加者）
8月22、23日	ぼかし、液肥投入	
9月3、18、23日	雑草抜き、雑草刈	
10月2、10日	堆肥液肥投入	
11月25-29日	稲刈り、脱穀、米蔵へ運搬、マメ科の種子を播いて覆土	稲刈りには約50名参加（ノーンメック村大人、青少年、その他関心のある者）

**(2) 森林保護・保全、有効利用活動**

◆**植林活動** 2017年6月24日 於ノーンメック村公共林 (220 ライ) 参加人数約 50 名 (ノーンメック村村人、KK 奨学生、保護者など)



村の公共林のほとんどは衰退した森林であり、継続的に村人たちが保全に努めてきましたが、2017年度は木が枯れたり伐採されてしまった空間に植林をしました。植林に先立ち、持続的な森林保護のためには、村のみんなが協力し参加する協働作業とするべきであるという村のリーダーの元、村の大人たちと青少年が一緒になって話し合いの場を持ちました。環境に配慮し多様な樹木を植えようと話し合われた結果、フタバガキ、チーク、メンガなどの苗木 2000 本を準備し、一斉に植えました。

木がたくさんあれば、キノコや薬草など有用な植物も増えます。採集して食べることもできるし、売れば収入になります。今回の植林は、村人たちが主体となって計画し実施しました。各人が自分たちの森として自覚し、自然を保護するだけでなく、どのように生活に利用できるかを考えながら行ったことは、コミュニティの一体感が出てきたと考えられます。

**4. 保護者とのネットワークづくり (子どもを愛する人のネットワーク)**

**(1) 家庭訪問**

2017年度は、前年に引き続き奨学生の家庭訪問を行ないました。奨学生の保護者のほとんどは、工場、建設現場、リサイクル業などの仕事に出ていて一日中家にいないため、時には夕食をともしながら、子どもの行動などについて深く話し合いました。また子どももそれまで保護者に言えなかったことを直接言える機会になり、親と子どもの関係が深まりました。

**(2) 家族キャンプ**

これまでは8月12日の母の日に実施していましたが、他の行事予定が多くあり、農繁期でもあるため、2月実施に変更しました。子どもも保護者も自分の言いたいことを言い、自分なりのやり方で一緒に楽しく交流しました。先輩である青年たちは、年下の子どもたちの話を聞き、アドバイスをする役を担ってくれました。また私たちの活動を知ってもらうためにノーンメック村の住民を招待しました。なぜなら子どもたちを見守るのはコミュニティであるからです。



実施日	活動	場所	参加者人数
2017年7月1日、8月31日、9月9、15日、10月4、13日、11月16、23、24日、12月17、23日、2018年1月13日、2月14日	子どもを愛する人のネットワーク・家庭訪問	コンケン県ノーンタカイ村ノーンメック村	25名
2018年2月2-4日	家族キャンプ	コンケン県カオスワンクワン郡ルカチャート・カオスワンクワン公園	45名 (奨学生、OB/OG、保護者家族、ノーンメック村住民)



## 5. 牛銀行プロジェクト

2013年6月からノンメック村で開始した牛銀行プロジェクトは、出稼ぎによる若年層流出を止め、コミュニティの担い手を育てるために、牛を育てて得た利益で村の青少年の就労支援基金の設立を目指すものです。しかし2015年ぐらいから口蹄疫が牛市場で流行りはじめ、村の牛にも感染しました。そのため新たな牛は購入していません。



2世帯の家族に各3頭を貸出して、すでに各頭に子どもが生まれました。そしてそれぞれ次の飼育者へと貸し出され、元の飼育者は2頭の子牛を得ました。新たに母牛とともに貸し出された子牛の所有権は、牛銀行にあります。もう少し大きくなるまで新しい飼育者が面倒をみるとのことです。新たな飼育者の元でもそれぞれ子牛が生まれ、授乳しているところです。

牛の飼育者は、村の牛銀行委員会が決定しますが、飼育するだけでなく、実験農場の耕起なども積極的に手伝ってくれており、新しい輪が広がっています。これまでのところ、不妊や病気の牝牛の交換があり、問題があるたびに牛銀行委員会と飼育者が話し合いを重ねてきました。現在の飼育者は、委員会によって選ばれた責任感のある人であるため、大きな問題とはなってはいません。

今後、新たな牛を購入するかどうかは、市場の様子を見ながら牛銀行委員会が相談し責任をもって決定します。

### 【成果と課題】

子どもたちの支援は、コミュニティの協力なくしては成り立ちません。2015年度より活動の中心を少しずつノンメック村に移し、村人たちとともに子どもへの支援を考えていくことを大切に事業を進めてきました。2017年度は、子どもたちを見守り育てるコミュニティ自体の力を強化するために、有機農業や食の安全性を考えた生活改善を目指しました。それは、村人たちの経済的向上だけを目指すのではなく、伝統的知識の継承を通じて、地元文化の重要性に気づき、自分たちの消費主義的な生活を見直し、農文化を基盤とした共同体の再構築を目指しています。そして大人と子どもたちが一緒に活動することによって、初めて達成できると考えました。2017年度は、その活動の成果が見え始めました。ノンメック村の多くの人々が協力し、有機農業や森林保全に関心をもち、青少年をコミュニティの一員としてとらえるようになったことは、これからの活動のよいステップになります。特に、みんなで話し合い、何かを決めて行う自主性が村人たちに見られるようになったことは、これまでの活動の成果と言えます。

また同時に、これまで学校やKK財団事務所を中心に、広範囲の子どもたちに奨学金を支給し、様々な活動の支援をしてきましたが、支援する対象が誰なのかが見えにくくなりました。コミュニティに重点を置くのか、子ども個人に重点を置くのかで自ずと活動は異なります。子ども個人への支援には限界があり、保護者の理解なくしては活動参加もできません。家庭の事情によって親のケアを受けることができない子どもたちも、コミュニティの子どもとして笑顔で自分に自信をもって育つことができるコミュニティづくりに向かうことが、今後の課題といえます。

そのためには、現地NGO支援の方法をこれまでから変えていくことも念頭において、現地スタッフと話し合いながら活動を進めていきます。



## B. フィリピン国 JPCoM-CARES (フィリピン国バギオ市、ベンゲット州カバヤン町) 支援事業

JPCoM-CARES (ジェイピーコム ケアーズ) は、必要な公共サービスや社会資源の乏しい山岳部バギオ市、ハッピーハロー村 (バギオ市内)、カバヤン町の3カ所を拠点に、しょうがいのある子どもや青年層が、地域で自立し尊厳のある暮らしを営める地域づくりに取り組んでいます。

◆2017年度の事業対象者数 (人) : 2016年6月～2017年5月の期間、下記の人数を対象に事業を行いました。

	継続	新規	計
バギオ市	87	50	137
ハッピー・ハロー村	15	0	15
カバヤン町	43	0	43
計	145	50	195

### 1. リハビリテーション&保健プログラム

#### (1) リハビリテーションセンターでの理学療法、作業療法、教育支援

バギオ市にあるリハビリテーションセンター「STAC5 (Stimulation & Therapeutic Activity Center : スタックファイブ)」(以下STAC5) では、あらゆるしょうがいを持つ子ども・青年を対象に、一人ひとりに必要な理学療法、作業療法および特別支援教育をアセスメントし、必要なサポートを行っています。月～金曜日、8時～17時まで開所し、保護者が付き添う、自宅から通う子どもたちを受け入れ、一人につき1回約60～90分のリハビリテーションを週に2回提供しています。定期的に、一人ひとりの成長や課題の再評価を行い、支援計画を変更しています。継続して利用している子どもたちには、少しずつではありますが、身体機能の回復や集中力の向上、コミュニケーション力や社会性が育ってきています。

◆リハビリテーション利用登録者数 (人) :

理学療法	作業療法	特別支援教育	自立生活プログラム	計
21	20	15	13	69

◆リハビリテーションサービス提供数 (回) :

理学療法	作業療法	特別支援教育	計
1,464	1,071	966	3,501

#### (2) 医薬品の支給

栄養失調状態にある子どもたちの健康の維持・向上を目的にバギオ市 20 名、ハッピー・ハロー村 7 名、カバヤン町 11 名の子どもに対して、1 年間マルチビタミン剤を支給しました。体重の増加、食欲の回復、疲労の軽減、アレルギー症状の改善がみられました。保護者 36 名にも、健康維持のため免疫力を高めるビタミン剤を支給しました。

#### (3) 医療サービスや医療機関の紹介・照会

新規利用者や療育支援をおこなっていく中で専門医による受診の必要性が出てきた子どもを地域パートナーである内科医に紹介しました。また、歯科検診・治療が必要な子ども 10 名を連携する歯科医につ

なりました。また虫歯予防のため、歯のクリーニングとフッ素の塗布、正しい歯の磨き方を指導してもらいました。口を開けたがらない、目にする機械に興味湧いて落ち着いて治療を受けることが難しいなど、十分な治療に至らなかった子どもが数名いました。

#### (4) 医療費等の一部支援

STAC5での療育支援を開始する際には、診断書を元に個別支援計画を作成します。子どもたちのしょうがい把握やその特性を理解するためには、専門医による診断が重要です。しかし、専門医による初回診察料は2,000～2,200ペソと非常に高く、経済的理由により必要な診察を受けられない子どももいます。また、急に体調を崩した際にも、経済的な理由により適切・必要な医療サービスを受けられない子どももいます。そのため、小児科医や専門医による診断、レントゲン検査、医薬品等にかかる費用の一部として、JPCoM-CARESが一人につき1,000ペソを支援しました。今年度は、子ども27名、保護者3名に支給しました。

#### (5) 温水治療

4月25日、理学療法を受ける子どもたち15名を対象に、温水プールにてリハビリテーションを実施しました。温水プール内での運動やエクササイズを通して、特に、脳性麻痺の子どもたちの筋肉の痙攣の軽減、身体機能やコントロールの維持・改善を目的に行いました。保護者・家族35名も参加し、理学療法士の指導のもと、自身の子どものエクササイズの方法を練習しました。

## 2. 教育支援

### (1) 奨学金

奨学金は、学費以外に通学費や制服の購入などにも使われ、子どもたちの学びをサポートしています。今年度は、バギオ市：11名、カバヤン町：25名の計36名に支給しました。クラスメイトと良好な関係を築きながら学校生活を送ることができており、以前と比べて、人前でも大きな声で話せるようになったり、中にはクラスで上位の成績をおさめている子どもたちもいます。苦手な科目は克服しようと努力し、保護者も家庭でサポートしています。クラスや担任の先生が変わる新年度に入る時期は、子どもたちも保護者も不安が高まるため、スタッフや担任、保護者で連携し情報共有を丁寧に行いました。

### (2) 学用品の支給

経済的な理由から、新年度に必要な学用品の購入が難しい家庭の子どもを対象に、バギオ市21人、カバヤン町25名の就学中の子どもたちに学用品の支給を行いました。

## 3. 自立生活プログラム

青年へと成長している子どもたちが、将来、地域の中で、自分で、または家族や地域の方々とともに自立した生活ができるように、2012年10月より「自立生活プログラム」を開始しました。

バギオ市やカバヤン町の参加者は、就学中の10代の子どもたちが多いため、2017年度も、これまで積み重ねてきた家事技術、調理技術、手工芸技術等の反復訓練を繰り返し実施しました。

就学期間を終えた 20 代以上の青年が参加するハッピー・ハロー村では、下記プログラム内容に加えて、一人ひとりの興味・関心に添った生計スキルの習得や実践の支援を行いました。2017 年度は、各自の畑で白菜やかぼちゃ、タロ芋、ピーナッツなどの野菜の栽培・収穫に挑戦し、村内でマーケットを開拓・販売し、収入を得ることができました。新たに、育てやすいきのこの栽培にも挑戦中です。育ちが早く、ほかの野菜と比較しても良い収入となるため、次年度にさらに栽培数を広げていきたいと計画を立てている青年も出てきました。



地域	対象者数	実施回数	プログラム内容
バギオ市	18	31 日	コミュニケーションスキル / マナー / 衛生・身だしなみ / ヘアアレンジ・メイクアップ / 口腔ケア /
カバヤン町	8	6 泊 7 日を 2 回	芸術・音楽活動 / 家事技術（掃除・洗濯・片付け・裁縫） / 調理技術 / お金の管理 / 医薬品の管理 /
ハッピー・ハロー村	6	24 日	応急手当の方法 / 交通機関の利用方法 / ビーズを使ったアクセサリーづくり

#### 4. 保護者のエンパワメント

##### (1) 生計向上プロジェクト

ネイルサービスで生計を立てる保護者 2 名と自立生活プログラムに参加し、カバヤン町でネイルサービスを行なっている聾啞の青年 1 名、および現地ネイリスト 1 名を対象に、日本からネイリストを招き、バギオ市の STAC5 にて、3 日間のネイルケア・デザイン研修を行いました。正しいネイルケアの方法と 10 種類程度のネイルデザインの研修を実施した後、最終日には検定試験にも挑戦しました。

これまで、ネット動画などを通して各自で技術習得・向上に励んでいた研修生たちでしたが、目の前で各プロセスの解説を聞きながらの研修に、新たな知識や技術の獲得に喜びを感じている様子で、熱心に取り組んでいました。





## 5. 権利擁護・コミュニティ啓発活動

アドボカシー活動として、以下の行事を実施しました。

日程	行事名	地域	参加者数	内容
6月22日	様々なしょうがいについて学ぶ研修	バギオ市	20	保護者や村議会メンバーを対象に、JPCOM-CARES が提供する支援や取り組みの紹介、それぞれのしょうがい特性についての説明を行いました。また、利用可能な地域資源や JPCOM-CARES 以外でサポートを行なっている他機関についての情報提供を行いました。
7月11～12日	身体しょうがい児セミナー	バギオ市	47	保護者や村議会メンバーを対象に、身体しょうがい児に関する知識を深めるためのセミナーを行いました。身体しょうがい児にとって理学療法的重要性について理解を深めるため、解説しながらエクササイズの実演を実施しました。
8月29～30日	しょうがいや行動特性への対処方法を学ぶセミナー	バギオ市	42	ダウン症、自閉症スペクトラム、注意欠陥・多動性障害等、それぞれのしょうがいと特性の違いを理解することを目的に行いました。保護者が直面している問題を共有し合いながら、子どもたちにどのような対応や支援が必要か、意見交換を行いました。
10月29日	STAC5 20周年記念 Run 2017	ハッピー・ハロー村	365	活動地域のハッピー・ハロー村自治体の協力を得て、チャリティ・ランを実施しました。（*詳細は下記）
11月17日	STAC5 20周年記念夕食会&活動展示会	バギオ市	264	20周年を記念し、また自主財源確保のため、夕食会を実施しました。子どもたちや保護者・家族だけでなく、多数の連携団体やゲストが参加しました。加えて、53名のスポンサーが夕食会の経費や JPCOM-CARES の取り組みを応援し寄付してくださいました。子どもたちが描いた絵を展示販売し、ファンディング活動も行いました。
1月27日	自閉症啓発月間ウォーク	バギオ市	54	自閉症だけでなく、すべてのしょうがい児への支援や協力の必要性を訴えるため、他団体とともに、バギオ市の中心地をパレードしました。
2月1日	植樹活動	バギオ市	52	地域貢献活動の一環として、公共の公園の植樹と草取りを行いました。子どもたちは、植物に触れることや自然の中で身体を動かすこと、他者と交流することなど、様々な体験を喜んでいました。
3月11日	Run for Amity (友好ラン)	ラ・トリニダッド町	798	活動地域のラ・トリニダッド町自治体の協力を得て、チャリティ・ランを実施しました。（*詳細は下記）



2017年度は、JPCoM-CARESの発案で、しょうがい児・者の活動に必要な自主財源を確保し、持続的に活動していくために新規事業として、2度のチャリティ・ランを開催しました。

第1回のプレ企画では、ハッピー・ハロー村で実施し、332名のランナーのエントリーがありました。61,221ペソ（約137,747円）の資金を得ることができ、その内、12,245ペソ（約27,551円）は、開催地ハッピー・ハロー村のしょうがい児・者のための活動に活かしてもらうよう自治体に寄付しました。

第2回は、ラ・トリニダッド町で実施しました。しょうがい児・者やご家族、関係機関、地域住民や自治体など、様々な人との友好や親睦を深めることを目指し、「Run for Amity（友好ラン）」というテーマを掲げて取り組みました。387名のランナーが参加し、ランナーを上回る411名の方々が運営のサポートをしてくださいました。STAC5でリハビリテーションを受けている子ども3名と家族5名もランナーとして参加し、親子でイベントを楽しんでもらうことができました。68,811ペソ（約137,622円）の資金を獲得することができました。その内、17,202ペソ（約34,404円）をラ・トリニダッド町に寄付し、行政が運営するしょうがい児・者のためのリハビリテーションセンターの運営に使っていただきます。

チャリティ・ランの開催にあたり、自治体関係者をはじめ、多数の警察官や陸軍関係者が予想以上の人員を動員し、コース誘導や交通整理などの場面で尽力してくださいました。各給水場に医療従事者を配置するなど、安心・安全に十分に配慮されていたとの声もランナーからいただきました。町長もJPCoM-CARESの取り組みや本イベントに対する感謝を述べてくださり、自治体の理解や確かな連携を得ることができました。



## 6. ネットワークづくり・社会資源の活用

地域パートナーや各関係者・機関とのネットワークの構築のため、下記の行事を実施しました。

日程	行事名	地域	参加者数	内容
7月20日	しょうがい予防&リハビリテーション月間	バギオ市	120	しょうがい予防やリハビリテーションの啓発活動として、子どもや保護者、関係者が集う場を持ちました。保護者によるネイルサービスやハンドマッサージ、自立生活プログラムで制作したプレスレットの販売なども実施し、参加者の活発な交流が生まれるように工夫しました。子どもたち同士も、ゲームなどを通して、仲間意識や友情を深めることができました。
8月2日	おやつ交流会	バギオ市	43	近隣に新しくオープンする飲食店のオーナーが STAC5 を訪れ、ハンバーガーやジュースを提供してくださいました。
12月9日	クリスマスプレゼントの寄付	バギオ市	75	ネットビジネス企業が STAC5 を訪問し、26人の子どもたちにプレゼントの寄付やクリスマスプログラムを実施していただきました。
12月16日	クリスマスプレゼント寄付	バギオ市	18	地域パートナーによるクリスマス会が企画され、子どもたちにクリスマスプレゼントを寄付しました。ミルクやオムツ、学校カバンなど、事前に必要なものをヒアリングしたものをプレゼントし、保護者も子どもたちもとても喜んでいました。
12月20日	年末&クリスマスの集い	バギオ市	219	クリスマス会や新年の集いを通して、子どもや保護者同士、家族とスタッフ間の親睦を深めることができました。
1月6日	新年の集い	カバヤン町	73	
4月17日	ATC 8周年記念&KAPSC 10周年記念	カバヤン町	81	カバヤンのリハビリテーションセンター設立から8年、保護者会結成から10年を祝いました。保護者会も、食事準備や会場設営など一致団結して協力くださいました。





## 【成果と課題】

2017年度は、JPCOM-CARESの発案で、活動に必要な自主財源の確保とネットワークづくりや連携パートナーを広げることを目指し、チャリティタ食会やチャリティ・ランを新たに企画し実施しました。この数年、連携団体へ積極的に働きかけ、新しいネットワークづくりに精力的に取り組んできた結果、新たな取り組みに対しても、想像以上の多数・多様な協力を得ることができました。特に、2度開催したチャリティ・ランでは、ランナーや運営支援者を合わせて1,000人を超える人々の参加が得られ、130,032ペソ（約275,369円）の資金を獲得することができました。獲得した資金の一部は、協力いただいた各自治体におけるしょうがい児・者のための取り組みに活用してもらうために寄付し、JPCOM-CARESと自治体が相互に協力し合う関係を築くことができました。この取り組みをきっかけに、新たな支援者との繋がりも得ることができたため、2018年度以降にさらなる連携をとっていくことを目指します。

自立生活プログラムでは、特に青年が参加するハッピー・ハロー村において、収入獲得を目指して、ビーズアクセサリーづくりの製作・販売、アイスクャンディーや古着の販売など、数年をかけて様々なことにチャレンジしてきました。今年度は、青年たちが根気よく互いに助け合いながら畑を耕し、野菜の栽培に力を注ぎ、少しずつですが収入に繋がってきています。

JPCOM-CARESスタッフは、青年一人ひとりの関心やしょうがいの特性などを考慮しながらエンパワメントを続けています。今後も、その時々により青年や子どもたちが必要な支援を見極めながら、地域資源をつなぎ、それぞれが思い描く将来展望へと進んでいけるようにサポートを行っていきます。

## C. 海外プロジェクト助成事業

2013年度よりカンボジアのNGOであるKhmer Community Development(以下、KCD)が活動するベトナム国境沿いの村プレックチュレイの子ども会活動を支援しています。

カンボジア農村では、就学年齢になっても学校に行けない子どもがたくさんいます。その主な原因は、家庭の貧困です。農村では、化学肥料や農薬に頼った換金作物栽培を続けたために、借金は増え、環境は破壊され、農業生産物を売った収入で米や野菜を購入しなければなりません。農業収入に期待できず、子ども連れで外国(タイ)へ出稼ぎに行く家族も増えています。そのため、KCDでは、マイクロクレジットや米銀行など農村開発事業に加えて、生産コストを抑え、環境にもよく、今後のマーケットが期待される有機農業を推進しています。

そこでC4Cは、2016年度からは、タイで行うカンボジア人スタッフと農民のための有機農業研修を支援しはじめ、タイで発展してきている有機農業のネットワークを通じて、有機農法のノウハウだけでなく、加工品作りやマーケティングなどを学ぶ機会をもってもらっています。その結果、2017年には、村人たちがプレックチュレイのコミュニティの中に小さな市場を開設しました。



また 2017 年度より KCD は活動対象地域を広げ、子ども会の活動と農村開発事業を行い始めました。特に離乳期の子どもの栄養状態がよくないことから、村の女性たちを対象に栄養学的研修を行っています。新しい対象地域の中の一つであるチョンサク村では、C4C も計画に参加することになりました。

C4C は、宮城学院女子大学・栄養学科の学生との協働で、2018 年度から離乳食研修プロジェクトを始める計画を立て、2018 年 5 月に代表・栗原と理事・加藤が離乳食プロジェクトのための事前調査をしました。

## 1-2. 国内支援事業「宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業」

『東日本大震災で甚大な被害を被った宮城県において、各地域の福祉力・防災力を高めるとともに、普段から、住民一人ひとりの命と暮らしを守ることを目指す。』

このことを実現するために、C4C は 2017 年度、宮城県内で取り組まれる児童・学生・青年層が主体的に参画する福祉・防災学習の実施について、10 歳の子どもの成人する期間をイメージして 10 年スパンの学習ビジョンを持ち、福祉・防災学習を実施・検討・計画されている地元の社会福祉協議会、NPO、教育機関等とご相談しながら次のようなことに取り組みました。

### 1、福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発

自主事業として『子どもの生活力→防災力向上プロジェクト』を実施しました。

子育ての専門家の方々や学生ボランティアの皆さんにご協力をいただき、子どもやそのご家族が普段の生活の中で自然と防災力を身につけられることを目指した「家庭の防災ハンドブック おうちで みんなで ふだんの暮らしに+1」を作成しました。1,000 部印刷し、関心をお寄せいただいた皆さまに配布したほか、掲載プログラムを活用したワークショップを県内外計 5 回実施しました。



また、本事業の普及・実施を目指して「家庭の防災普及啓発キャンペーン」を実施し、今後の事業展開のためのご寄付を募りました。

#### ● ワークショップの実施

◇ 2017/7/27 柴田町社会福祉協議会「夏の福祉体験学習」

参加者: 町内の小学 1~2 年生 22 名

協力: 柴田町食生活改善推進員連絡協議会

船岡中学校ボランティアセンター

会場: 柴田町地域福祉センター

内容: 食育クイズ、ハンドブック掲載レシピの調理



◇ 2017/9/22 子育てサークルチップとディル 防災教室

参加者: チップとディルの親子 6 組

協力: 石巻市社会福祉協議会

会場:桃生子育て支援センター(石巻市)

内容:れんらくボードづくり

- ◇ 2017/11/5 石巻市立住吉幼稚園 防災教室  
参加者:住吉幼稚園の園児・保護者約 40 名  
会場:石巻市立住吉中学校(避難訓練と引き渡し訓練の合間に開催)  
内容:ぼうさいビンゴ、ハンドブックの紹介

- ◇ 2018/2/17 嘉手納町社会福祉協議会  
「ふだんのくらしの防災教室」  
参加者:町内の親子 6 組  
会場:嘉手納町総合福祉センター(沖縄県)  
内容:ぼうさいビンゴ、れんらくボードづくり



- ◇ 2018/2/25 歌笛地区子ども・おとな企画実行委員会「地域防災研修会」  
参加者:町内の子ども・大人約 30 名  
会場:歌笛総合住民センター(北海道新ひだか町)  
内容:防災クッキング、れんらくボードづくり

- 家庭の防災普及啓発キャンペーン  
寄付件数 7 件(団体 2 件、個人 5 件)

## 2、福祉・防災学習人材育成事業

- 福祉学習勉強会

2016 年度に開催した防災学習勉強会に参加して下さった社会福祉協議会の職員の方々から、ベースとなる福祉学習についても考えたいとの声を受け、福祉学習に取り組む皆さんとともに、「福祉を学ぶということ」や「学びの場を作るとのこと」の目的や意義等を改めて考えながら、学習者の現状やニーズのとらえ方・学習プログラムの作り方・学びの場づくりの工夫の仕方などを学び合い、参加者それぞれの実践活動に活かしていただけることを目指し開催しました。

なお、開催にあたっては福祉教育・ボランティア学習に関する研究と実践を進めている「日本福祉教育・ボランティア学習学会 東北ブロック」と共催しました。

- ◇ 第1回「福祉学習とは?～“福祉”の伝え方を考えよう!」  
日時:2017/10/21 13:30～16:30 会場:トークネットホール仙台 参加者:7 名  
進行(全回共通):

奥山 留美子 氏(山形県立高島高等学校 校長/日本福祉教育・ボランティア学習学会 理事)  
須田 めぐみ 氏(日本福祉教育・ボランティア学習学会 特任理事)



栗原 英文・菅原 清香(一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン)

内容:オリエンテーション、講義/日本の福祉と福祉学習の歴史、参加者の福祉学習実践について情報交換

◇ 第2回「学校における福祉学習の取り組み～先生と語り合おう！」

日時:2017/11/25 13:30～16:30 会場:仙台市立北中山小学校 参加者:8名

講師:木越 研司 氏(仙台市立北中山小学校 校長)

奥山 留美子 氏(山形県立高島高等学校 校長/日本福祉教育・ボランティア学習学会 理事)

内容:講義/「学び」について、実践紹介/小学校高校における福祉学習、学校との連携について意見交換

◇ 第3回「地域における福祉学習の取り組み～地域で福祉の花を咲かせよう！」

日時:2017/12/16 13:30～16:30 会場:トークネットホール仙台 参加者:9名

講師:猪俣 健一 氏(社会福祉法人阪南市社会福祉協議会 主任)

内容:実践紹介/阪南市における地域福祉活動、地域福祉活動と福祉学習について意見交換



● 自主勉強会（相談会）

福祉学習勉強会参加者の皆さんから、実践を進めていくうえで相談し合える場が必要との声を受け、自主勉強会を開催しました。

◇ 第1回「地域サロンのあり方を考えたい！」

日時:2018/1/28 13:30～15:30 会場:戦災復興記念館(仙台市) 参加者:6名

話題提供者:蔵王町社会福祉協議会 山家宗一郎さん

◇ 第2回「避難所生活について考える学習プログラムを考えたい！」

日時:2018/4/8 13:30～17:30 会場:戦災復興記念館(仙台市) 参加者:8名

話題提供者:コミュニティ・4・チルドレン 菅原清香

ゲスト:あそびの工房もくもく屋 田川雅規さん

### 3、福祉・防災学習実践支援事業

県内各地において、福祉・防災学習の推進をサポートしました。

① 地域福祉・福祉学習の担い手育成プログラム

● 福祉教育推進事業運営委員会（2016年度～2018年度継続事業）

主催:女川町社会福祉協議会(宮城県社会福祉協議会「地域指定福祉教育推進事業」による実施)

「一人ひとりのちがいを認め合い、支え合うことの大切さへの気づきをうながす」ことをテーマに、運営委員会を設置。どのような取り組みが必要か・その際に必要な工夫や配慮は何かを話し合い、2017年度はささえあいゲームを町内各地で実施し支え合いの啓発活動に取り組みました。(C4Cみやぎは運営委員会における進行役を担当)

2017/6/20	2017年度第3回運営委員会
2017/7/11	2017年度第4回運営委員会
2017/7/31	事務局会議
2017/8/18	2017年度第5回運営委員会
2017/9/5	事務局会議
2017/9/7	ささえあいゲーム体験会実施
2017/9/22	2017年度第6回運営委員会
2017/10/18	事務局会議
2017/10/27	2017年度第7回運営委員会
2017/11/9	2017年度第8回運営委員会
2017/12/4	事務局会議
2017/12/15	2017年度第9回運営委員会
2018/2/8	2017年度第10回運営委員会
2018/3/15	2017年度第11回運営委員会
2018/4/24	事務局会議
2018/5/17	事務局会議
2018/5/31	2018年度第1回運営委員会

● おおさき福祉学習推進事業（2016年度～継続事業）

主催：大崎市社会福祉協議会

地域共生社会の実現に向けた、地域福祉推進の人材育成を目的とした福祉学習事業を、支所をモデル指定し実施。2017年度は岩出山支所を指定。岩出山支所・大崎市社会福祉協議会本所・C4Cの連携により事業の企画立案・実施に取り組みました。(C4Cみやぎは本事業のアドバイザーを担当)

2017/6/6	岩出山支所と事業実施に向けた打ち合わせ
2017/6/23	岩出山支所と事業実施に向けた打ち合わせ
2017/7/20	岩出山支所と事業実施に向けた打ち合わせ
2017/8/2	「夏休み★子ども福祉学習～簡単防災 Cooking 体験～」実施
2017/9/1	本所と年度後期の事業推進について打ち合わせ
2017/9/25	岩出山支所と、事業実施の振り返り&年度後期の事業推進について打ち合わせ
2017/10/4	岩出山支所による小学生向け福祉学習実践を確認
2017/10/19	岩出山支所による小学生向け福祉学習の振り返り
2017/11/14	鹿島台支所による小学生向け福祉学習実践を確認
2017/11/17	本所と報告会開催打ち合わせ
2017/11/21	岩出山支所と学校における福祉学習推進を再検討
2017/12/7	本所・岩出山支所と報告会開催打ち合わせ
2017/12/11	支所職員を対象に本年度事業報告&意見交換会開催
2018/1/19	本所と2018年度計画打ち合わせ 岩出山支所と学校向け福祉学習提案資料作成
2018/2/9	岩出山支所と学校向け福祉学習提案資料作成
2018/3/13	本所と2018年度計画打ち合わせ 岩出山支所と学校向け福祉学習提案資料作成
2018/4/11	本所と2018年度計画打ち合わせ
2018/5/28	本所と2018年度計画打ち合わせ

● 中学生・高校生・大学生のボランティア場づくり事業（2016年度～継続事業）

主催：仙台市社会福祉協議会若林区事務所

協力：一般社団法人 ReRoots、東北学院大学災害ボランティアステーション、東北大学ボランティアサークルたなぼた、宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!

区内で活動する大学生ボランティア団体と中高生がともにボランティア活動に取り組む場を創ることで、ボランティア活動の促進や中高生が将来のキャリアについて考える機会とするとともに、区内で活動するボランティア団体や地域団体の輪を広げることを目的として2016年度から始まった事業です。



2018年度は協力団体に東北大学ボランティアサークルたなぼたが加わり、ターゲットを高校生に絞って事業を進めています。（C4Cみやぎは全体コーディネートを担当）



2017/6/9	担当者との打ち合わせ
2017/6/27	第1回企画会議
2017/8/25	第2回企画会議
2017/9/5	東北学院大学災害ボランティアステーションと打ち合わせ
2017/9/8	第1回参加者説明会
2017/9/26	第2回参加者説明会
2017/10/12	担当者との打ち合わせ
2017/10/15	東北学院大学災害ボランティアステーション活動日(若林区民まつり・社協ブースの出展補助)
2017/10/28	一般社団法人 ReRoots 活動日(わらアート用わらシート編み)
2017/10/29	一般社団法人 ReRoots 活動日(わらアート用わらシート編み) 宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!活動日(南小泉南赤十字奉仕団・防災クッキング)
2017/10/31	担当者との打ち合わせ
2017/11/12	ふりかえり交流会
2017/12/19	担当者とのふりかえり
2018/3/12	担当者との打ち合わせ(2018年度事業計画)
2018/3/19	東北大学ボランティアサークルたなぼたとの顔合わせ
2018/4/6	第1回企画会議
2018/4/12	担当者との打ち合わせ
2018/4/23	東北学院大学災害ボランティアステーションとの打ち合わせ
2018/5/9	担当者との打ち合わせ
2018/5/18	第一回参加者説明会 宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!との打ち合わせ

● 福祉教育モデルプログラム作成事業

主催:石巻市社会福祉協議会

石巻市社会福祉協議会の第二次地域福祉活動計画に則って作成されました。

職員による作成会議を経て、5分野にわたる福祉学習モデルプログラムを考案し、地域の方の声も盛り込みました。(C4Cみやぎは外部支援者の立場で作成協力)

会議日程…

2017/7/11, 8/18, 8/24, 9/13, 9/21, 10/18, 10/26, 11/10, 11/16, 12/14

2018/1/10, 2/6, 2/8, 2/22



② 防災学習の担い手育成プログラム

● 2017/9/23 宮城県教育委員会「防災キャンプ指導者研修」

参加者:県内で防災学習に取り組む方々30名

会場:松島自然の家(東松島市)

内容:C4Cみやぎの実践紹介、防災ゲームの実習

③ ふくし体験プログラム

● 2017/7/28 角田市社会福祉協議会「夏休みふくし体験 in かくだ」

参加者:市内の小学生30名

会場:ウエルパークかくだ

内容:ウエルパークかくだ内での福祉探検、防災クッキング

④ ふくしのキャリア学習プログラム

● 2017/8/3 柴田町社会福祉協議会「夏の福祉体験学習(小学3~6年)」

参加者:町内の小学3~6年生30名

協力:柴田町食生活改善推進員連絡協議会

船岡中学校ボランティアセンター

会場:柴田町地域福祉センター

内容:ボランティア活動体験、防災クッキング、福祉の仕事インタビュー



● 2017/8/7 角田市社会福祉協議会「夏休みふくし体験 in かくだ(中高生・深める編)」

参加者:市内の中高生11名

会場:ウエルパークかくだ

内容:市内の福祉施設における福祉の仕事体験・インタビュー

⑤ ボランティア体験プログラム

● 2017/8/4 角田市社会福祉協議会「夏休みふくし体験 in かくだ(中高生・はじめる編)」

参加者:市内の中高生13名

会場:ウエルパークかくだ

内容:市内の福祉施設・ボランティア団体でのボランティア体験

● 2017/8/8 柴田町社会福祉協議会「サマーボランティア体験学習(中高生)」

参加者:町内の中高生15名

会場:柴田町地域福祉センター

内容:24時間テレビの募金活動とあわせて作成・福祉まつりで展示するアート作品を考案

⑥ 子どもの防災力向上プログラム

● 2017/6/20 女川町立女川小学校 防災の授業

依頼元:女川町教育委員会・女川町社会福祉協議会

参加者:3・4年生

内容:防災リュックの中身を考えるグループワーク

- 2017/8/19 塩釜市教育委員会「しおがま何でも体感団」

依頼元:NPO法人まなびのたねネットワーク

参加者:市内の小学生親子 43名

会場:ブルーセンター(塩釜市野々島)

内容:野々島防災ウォーク、非常食づくり、防災グッズづくり



- 2017/12/1 川崎町立前川小学校 防災の授業

依頼元:川崎町社会福祉協議会

参加者:親子約 50名

内容:防災クイズ(事前課題)、防災グッズづくり、防災グッズ展示、非常食試食

#### 4、福祉・防災学習推進のためのネットワーク構築

県内外で開催された会議への出席・研修への参加・事業の視察や、個別の情報交換・ヒアリング・相談対応を行い、福祉・防災学習にかかわる情報収集・提供、ネットワーク構築に取り組みました。

- 会議への出席

2017/6/14、9/13、10/11、11/8 みやぎ広域支援団体担当者連携会議(仙台市)

2017/6/12 みやぎこころのデザイン教育実行委員会(仙台市)

- 研修への参加

◇ 県内:

2017/6/8 「広がれ！こども食堂の輪！」全国ツアー in みやぎ(仙台市)

2017/6/9 岩沼市社会福祉協議会「福祉教育実践発表・研究会」

2017/6/28 石巻市社会福祉協議会「福祉教育研修会」

2017/10/7 日本ファンドレイジング協会東北チャプター

「第2回ファンドレイジング・サロン in 東北:社会貢献教育～海外の実践事例と日本の展開」(仙台市)

2017/11/24 宮城県社会福祉協議会「平成 29 年度 災害ボランティアセンター応援スタッフ養成研修」(仙台市)

◇ 県外:

2017/7/25～26 全国社会福祉協議会「全国福祉教育推進セミナー」(東京都)

- 事業の視察

2017/6/18 柴田町社会福祉協議会「ワンダーランド」

2017/8/27 仙台市「せんだい防災のひろば 2017」

2017/11/21 美里町社会福祉協議会 美里町立中塚小学校における防災の授業

2017/12/26 川崎町社会福祉協議会「冬休み福祉体験」



- 情報交換・ヒアリング（順不同）

- ◇ 県内：

東北福祉大学ボランティア支援課、東北福祉大学学生サークル Shake F Hearts、わしん倶楽部、NPO法人子どもグリーンサポートステーション、岩沼市社会福祉協議会、色麻町社会福祉協議会、登米市社会福祉協議会、利府町社会福祉協議会、宮城県社会福祉協議会

- ◇ 県外：

株式会社野村防災（新潟県）、長岡震災アーカイブセンターきおくみらい（新潟県）、会津若松市社会福祉協議会（福島県）、長岡市社会福祉協議会（新潟県）、新潟県社会福祉協議会、阪南市社会福祉協議会（大阪府）、京都府社会福祉協議会、滋賀県社会福祉協議会、沖縄県社会福祉協議会

## 5、普及啓発のための情報発信

Facebook ページの立ち上げや、広報誌「福祉みやぎ」（発行：宮城県社会福祉協議会）への寄稿を行いました。また宮城における福祉・防災学習の取り組み状況を発信し、普及啓発をはかる機会として県外における下記事業や研修会においてアドバイザーや講師をつとめました。

青森県社会福祉協議会「地域における福祉学習実践事業」

（年間を通じ、おいらせ町社会福祉協議会・五所川原市社会福祉協議会の実践支援／県域報告会への出席）

2017/7/13 能代市社会福祉協議会「災害ボランティアスクール」（秋田県）

2017/7/17 福島市社会福祉協議会「サマーショートボランティアスクール」（福島県）

2017/7/24 田辺市社会福祉協議会・教育委員会「田辺市福祉教育研修会」（和歌山県）

2017/11/23 田村市社会福祉協議会「快適避難所ライフセミナー」（福島県）

2018/1/17 長岡京市社会福祉協議会「福祉・防災学習研修会」（京都府）

2018/2/24 新ひだか町社会福祉協議会「災害ボランティア研修・職員研修」（北海道）

2018/3/9 五所川原市社会福祉協議会「わがまちのそなえる防災セミナー」（青森県）

### 【成果と課題】

2017 年度は、以下のようなことに取り組みました。

- 福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発の自主事業として『子どもの生活力→防災力向上プロジェクト』を実施。子育ての専門家の方々や学生ボランティアの皆さんにご協力をいただき、子どもやそのご家族が普段の生活の中で自然と防災力を身につけられることを目指した「家庭の防災ハンドブック おうちで みんなで ふだんのくらしに+1」を作成しました。1,000部印刷し、関心をお寄せいただいた皆さまに配布したほか、掲載プログラムを活用したワークショップを県内3回・県外2回の計5回実施しました。また、本事業の普及・実施を目指して「家庭の防災普及啓発キャンペーン」を実施し、今後の事業展開のためのご寄付を募りました。
- 福祉・防災学習人材育成事業として自主事業『福祉学習勉強会』を実施。3回シリーズで実施し、延べ24名

(全回参加者 6 名)にご参加いただきました。社会福祉協議会・NPO・学校といった福祉学習の多様な担い手の方々にご参加・ご協力をいただき、ともに学び合うことができました。また日本福祉教育・ボランティア学習学会の共催をいただき、企画運営を理事の方々にご協力いただけたことで、より学びの場としての意義を深めることができました。しかし昨年度防災学習勉強会を開催した時よりも社会福祉協議会職員以外の参加が少なく、福祉学習の意義や担い手の裾野を広げることの必要性を感じています。なお参加者の満足度は高く、今後学んだことを活かしていく際に相談しあえる場があればとの声をうけ、『自主勉強会(相談会)』を立ち上げ年度内に 2 回実施しています。

- モデル事業の実施においては、6 パターンのプログラムの実践支援に取り組みました。単発の研修・事業を打ち出すことより厚生労働省が「地域共生社会」の実現に向けた様々な社会福祉制度の改革を始めたことを受けて、改めて福祉学習の見直し・推進に取り組んでいきたいというご相談の声が高まっています。
- ネットワーク構築においては、県外の福祉・防災学習推進に携わる方々との情報交換の中で、コラボレーション企画の検討に向けたアイデアが生まれ始めました。宮城でのこれまでの取り組みやネットワークを活かしお互いにとって相乗効果のある連携ができるよう、議論を重ねていきます。

こうした 2017 年度の取り組みから、

- ・ 災害の歴史や学習者・地域のニーズにあった防災学習プログラム・ツールが必要であること
- ・ 自主勉強会のような、福祉学習を推進する人どうしが主体的につながり・高め合える場が必要であること
- ・ 地域共生社会の実現に向けて、福祉学習推進においても中長期的な目標設定・プログラム開発や実践活動へのサポートニーズがあること

といった現状・課題・変化を感じました。特に厚生労働省が「地域共生社会」の実現に向けた様々な社会福祉制度の改革を始めたこともあり、地域共生社会をかなえるために必要なことを県内の社会福祉協議会等と議論する中で、福祉学習の推進に関して以下のような視点が大切であることが、以前に増して語られるようになりました。こうした視点を持ちながら、各地域での取り組みを支えていくことを大切にしていきたいと考えています。

※地域全体の福祉力を高めていくために…

- ・ 地域で取り組まれている福祉活動に、福祉学習的視点をもって関わり・推進していくこと  
(地域の課題解決や福祉力向上に向けて、住民一人ひとりが、現状や課題を知り主体的に関わる姿勢を育む・関わられる機会や場を創出する)
- ・ 学校や地域からの依頼を例年通りこなすのではなく、地域の福祉力を高めていくために必要なことは何か、中長期的な見通しを持って福祉学習を推進していくこと
- ・ 従来付き合いや関係性のある団体・機関だけでなく、地域の福祉力向上に向けて必要と思われるさまざまな団体・機関と連携しながら、より地域に根差した福祉学習を推進していくこと

## 2. 文化交流活動支援事業

### 2-1. スタディツアー

#### (1)タイ・スタディツアー「宮城発！地域を愛する子どもを育てる東北タイ・ノンメック村へ」2017年8月11-16日(5泊6日)

宮城県内の社会福祉関係者を対象に、タイ農村で地域コミュニティの活動や地元文化に触れるツアーを KK 財団とノンメック村村人の協力を得て開催しました。参加者は、関西からの参加を含め 6

名で、社会福祉協議会職員 4 名、NGO 職員 1 名、NPO 職員 1 名でした。事前に 3 回集まりを持ち、現地では日本食の紹介など積極的に交流を図りました。

炎天下の田植え、家庭訪問、牛銀行などの村の活動視察、現地スタッフへのインタビュー、寺院への食事の寄進などを通して、地元の文化を体験し、コミュニティに入って仕事をする困難さや楽しさに共感し、自らが活動する地域と比べながらこれからどのように自分たちの地域で仕事をすればいいのかを考える日々を過ごしました。タイでの経験をこれからの仕事に活かしてくれるだろうと期待しています。

またサワディープロジェクト(箕面市でタイへ絵本の寄付活動をしている団体)から絵本の寄贈があり、ソムチャーイ行政区区長に贈呈しました。

最終日は、チョンブリ県自閉症センターを短時間ですが訪問し、自閉症の子供をもつお母さんたちが設立したセンターを見学しました。

#### (2)NTT 労組関西総支部タイ・ワークキャンプ

2018年2月21-27日(6泊7日)、NTT 労働組合関西総支部が国際ボランティア活動として『タイ東北地方農村ワークキャンプ』を実施し、KK 財団と C4C が調整を行いました。組合員 12 名、学生通訳 2 名が参加し、コンケン県ノンメック村でホームステイしながら村人との交流、協働に励みました。

NTT 労組関西総支部とタイ農村との関係は、2014年のスタディツアーに始まります。その後、2015年スタディツアー、2016年2月スポーツコート建設、2017年2月日タイ交流センター(コミュニティ多目的センター)建設と続きました。今回のワークでは、これまでのワークキャンプの成果が地元コミュニティでどのように利用されているのかを視察するとともに、村人たちが現在関

心を持ちつつある有機農業の取り組みを応援するための堆肥作り、飲料水にも利用する池の水を浄化するための EM 団子作り、家庭菜園に利用できるように池の周りの整備を手伝いました。そして村の文化継承活動の一環として、伝統的なお菓子を一緒に作りました。忙しい中多くの村人たちが集まってくれ、「日本から私たちの文化を共有しに来てくれることで、私たちも自信を得ることができる。来年も来てくれるのを楽しみにしている」と行政区区長からもお言葉をいただきました。





最終日は、チョンブリ県自閉症センターを短時間ですが訪問し、自閉症の子供をもつお母さんたちが設立したセンターを見学しました。

### (3) フィリピン・チャリティラン・ツアー

2018年3月8-13日フィリピン・ベンゲット州ラ・トリニダッド市において、JPCOM-CARES 主催で開催されたチャリティランに、5名が参加しました。高校生2名、大学生1名、社会人2名で、うち一組の親子でした。全員、開催日の前の準備作業や当日の5キロコースに参加し、初めての海外マラソン体験を楽しむと同時に、しょうがい児・者に対する現地での試み、フリースクールのことなど、様々な経験を得ることができました。最終日には、自立生活プログラムに参加し、一緒にビーズ作りをしました。初めての試みだったチャリティラン・ツアーに、これまでのC4Cスタディツアー参加者とは異なる方々が関心を持ってくれ、今後のツアーのあり方を考えることができました。



### 2-2. チャリティラン応援事業(フィリピン・しょうがい児・者自立生活支援事業)

2018年3月11日、フィリピン・ラ・トリニダッド町において、JPCOM-CARES 主催で行われたチャリティランに合わせて、日本でも記念品付き寄付を募りました。

沖縄から北海道まで日本全国から26名の方々がサポーターとなり、本取り組みを応援くださいました。加えて、日本からのランナー参加者からは、エントリー料として総額18,000円の寄付をいただきました。

3月11日のイベント終了後、寄付者の皆様には、報告書、現地団体からの感謝状、申し込みいただいた寄付コースの感謝の品をお届けしました。感謝の品は、子どもたちが手作りしたビーズブレスレットや手描きの絵、カバヤン町のお母さんたちの手織り商品、山岳部で収穫されたコーヒー、チャリティランの記念Tシャツと、フィリピンにまつわる商品を選びました。皆様からの寄付額から必要経費を差し引き、86,708円を現地団体JPCOM-CARES に寄付しました。



また、チャリティラン当日は、寄付者の皆様からいただいた温かいメッセージを会場に掲示しました。多くのランナーの方々が熱心に見てくださっていました。

### ★ご寄付の内訳

寄付コース	申込額	人数	計
てくてくコース	3,000円	10人	30,000円
ルンルンコース	5,000円	11人	55,000円

ランランコース	10,000 円	5 人	50,000 円
ランナーエントリー料	3,000 円	6 人	18,000 円
合計			153,000 円

### 3. 視察・研修・ワークショップ事業

#### 3-1. 研修事業

##### (1) タイにおけるカンボジア人農業研修

2017年7月29日—8月3日 タイ・コンケン県周辺において、KCD からカンボジア人スタッフ4名を招聘して、有機農業研修を行いました。KCDではこれまで対象地域で有機農業の普及活動をしていて、現在、有機農業生産物を売るためのコミュニティ・マーケットを設立しようとしており、そのため有機農業研修と同時にマーケティングのノウハウをタイの有機農業実践者やそのネットワークから学ぶための研修です。様々なタイの農民の好意により有機農業グループを訪問し、ホームステイしながら農場や市場を視察しました。この研修プログラムは、継続する予定です。



##### (2) フィリピン・ネイル研修

2017年11月20—24日、フィリピン・バギオ市 JPCOM-CARES のリハビリテーションセンターで、しょうがい者および保護者のための就労支援としてネイル研修を行いました。ネイリストである新田香奈さんのご好意により、ボランティアとして講習していただきました(前述)。



#### 3-2. 国内 IDoCafe(あい・どう・かふえ) 事業

##### ◆ IDoCafe vol.13 「知りタイ! 聞きタイ! タイの結」

2017年9月10日 14:30—17:30、会場:エル・パーク仙台セミナーホール2

参加者26名(一般参加者16名、ツアー参加者6名、スタッフ4名)、8月に行った宮城発タイ・スタディツアーの帰国報告会を兼ねて、開催しました。ツアー参加者全員がそれぞれ感じたことを発表し、これから自分の仕事のなかでどのように経験を生かすか、IDoを考えました。

### 4. パートナーシップ推進事業

#### 4-1. 調査事業

(1)宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業のための調査

調査実施者:Human Being 菅原清香会員

宮城県および周辺県等において、国内事業「福祉・防災学習推進事業」の実施主体を訪問し、ヒヤリング調査、研究、事業実施に関する意見交換を行いました。C4Cの各事業と当事業との調整も行いました。

## (2)カンボジアにおける離乳食研修のための事前調査

2018年5月24-27日、KCDスタッフとともに2018年度より始める、日本人学生による離乳食研修の事前調査を行いました。日本では宮城学院女子大学・栄養学科の学生ボランティアサークルFood and Smile!(FAS)が、カンボジアにおいて離乳期の子どもの栄養状態が悪い状況を知り、離乳食研修を行うために地元の食材を使った無理のない離乳食レシピを考えようと何度か話し合いをしま



した。そしてレシピ考案、カンボジアでの研修に向けて、まず現地のことを知るのが肝心であると、学生が考えた質問票を元に、代表理事・栗原と理事・加藤が対象地であるカンダール州チョンサック村で、小さな子供がいる女性および妊婦にインタビューしました。また台所の状態、地元の野菜、雑貨店の食材などを観察・調査し、できる限り現地の食生活の状況を把握しました。FASはこの結果を踏まえ、今後カンボジアでの研修を計画します。

## 5. 情報提供事業

### 5-1. ホームページ、ブログ、Facebookによる情報発信

2017年6月～2018年5月末の間に、1,526の方がホームページを訪問くださり、3,984のプレビューがありました。昨年度と比較して、訪問者数約300人、プレビュー数約600ページ増加しています。ホームページとFacebookの活用方法を整理し、それぞれの特徴を活かした情報発信に努めます。

### 5-2. イベント参加

#### ◆ワン・ワールド・フェスティバル for Youth—高校生のための国際交流・国際協力 EXPO

2017年12月23日 10:00-16:00 於大阪 YMCA

テーマは「知ろうぜ世界！動かせ未来！」

昨年同様、C4Cとして活動紹介ブースを出展しました。

#### ◆ワン・ワールド・フェスティバル

2018年2月3-4日 10:00-17:00 於カンテレ扇町スクエア、北区民センター

毎年行われる世界につながる国際協力の祭りにC4Cとして活動紹介ブースを出展しました。3月開催予定のフィリピン・チャリティランの紹介に、多くの方が新しい支援の仕方として注目していただきました。



## 6. 組織運営

### ◆2017 年度会員について

2017 年度会員・寄付者

#### ●会員数の変動

		2016 年度	2017 年度 (2018 年 5 月 31 日現在)
正会員数	個人	14	19
	団体	1	2
賛助会員数	個人	9	22
	団体	2	1
使途指定寄付	タイ・牛銀行	3	3
	フィリピン	2	3
	フィリピン・チャリティラン		26
	家庭防災キャンペーン		6
一般寄付		5	5

総会員数は、2016 年度個人、団体、正会員、賛助会員合わせて 26 名だったのが、2017 年度 44 名に増加しました。タイ、フィリピンへのスタディツアーを行ったため賛助会員が増えたことが理由です。また家庭防災キャンペーンやフィリピンでのチャリティ・ラン開催と並行して募った記念品付き寄付のため、寄付者数が大幅に増えました。

しかしながら SNS を通じた情報発信や IDoCafe など、国内で活動紹介をする機会がまだまだ少なかったと思われます。寄付などの行為を通じたキャンペーンを含めて、実際に見たり聞いたり参加したりという能動的行為がある方が、活動に参加しやすいようなので、今後は C4C の活動をキャンペーンやスタディツアーを通じて、多くの人に C4C を知ってもらい、新規会員の獲得や会員継続に努めます。



